

映画翻訳が英語学習にもたらす有効性
—— Authenticな教材から学ぶ ——

How Translating Movies Affects English Learning
—— Learning form Authentic Materials ——

山科 美智子

YAMASHINA Michiko

映画翻訳が英語学習にもたらす有効性

—— Authenticな教材から学ぶ ——

How Translating Movies Affects English Learning

—— Learning form Authentic Materials ——

山科 美智子

YAMASHINA Michiko

Abstract: What are the benefits of using movies as EFL class materials and also teaching movie translation to English learners instead of using published English learning materials? Rather than using authentic language, English learning materials are often developed to match learners' levels: the authors first decide on the target grammar and vocabulary and then create dialogues and reading materials according to that target. Audio segments adjust speaking speed and use speakers who speak “standard” English. Although these materials are easy to use for both teachers and learners, many English learners who have learned English via these artificial and biased materials can't understand authentic English when they travel in English-speaking countries. In this paper, I will investigate the benefits of movies as sources of authentic spoken English, and also the benefits of having the students translate sections of those movies. My students learned colloquial language, idioms, and vocabulary as well as the structural differences between Japanese and English and the cultural differences between Japan and Western countries. In addition, translating the movie segments allowed learners more creativity, which increased their motivation for learning.

Keywords: translation, authenticity, cultural differences, colloquial language, movies

1. はじめに

昨今、様々な英語教材の開発が進んでいるが、英語教材ではなく、一般向け映画を教材として使い、映画翻訳を英語教育に取り入れることはどのようなメリットがあるだろうか。

第一に、映画は学習教材として作られたものではないため、現実世界で自然に話されている英語がそのまま使われており、語彙やフレーズも、発音やスピードもauthenticity(真正性)が高い。一方、英語の学習教材を作成する場合は、まずターゲットの学習者のレベルに合わせ、教えたい文法、語彙を決め、それらを教えるためのダイアログやリーディング教材を作成するため、日常ネイティブが自然に使う言語との間にギャップがあることが多い。また、音声や映像の教材を作成する場合も、学習者が聞き取りやすいようにスピードを調節したり、いわゆる「きれいな英語」と称される正統派の発音をする話者を用いたりして作成するが多い。つまり、英語学習者は、すでに教材作成者のバイアスのかかった英語や加工された英語を学んでいることになるのである。確かに学習者のレベル別に難易度を調整された教材は使いやすいが、そういったいわゆるビニールハウス栽培の英語と、現実世界の多種多様な環境で自然に話されている英語の間には必然的に大きな差異が生じてくる。英語を長く学んでいるけれど、実際にネイティブと話すことはできないという学習者や、海外で聞く英語はスピードも速く発音も様々で、日本の学校で学んでいた英語と違う、といった感想を持つ学習者も多いのは、聞きやすく学びやすいように加工された英語教材ばかりを用いる弊害とは考えられないだろうか。そういった点を踏まえると、一般向けのエンターテインメントとして制作された映画を教材として使うことは、加工されていないauthenticな英語にふれるという面でEFL環境で学ぶ学生には大きなメリットがあると思われる。ネイティブのナチュラルスピードの英語を聴きながら、より自然な口語やフレーズ、イディオムなどもふんだんに学ぶことができるのである。

第二に、そうしたauthenticな英語を日本語に「訳す」作業によって、英語と日本語の成り立ちの違い、双方の文化の相違点と類似点を学ぶことができる。言語学習において、「訳す」という作業はコミュニケーションを目的とした言語習得にあまり効果がないとされ、訳すことが主体となるTranslation Methodは批判される傾向があるが、ガイ・クックは、『英語教育と「訳」の効用』(2012)の中で、「訳すという営みの記述・分析が言語学習・言語使用の成功に貢献するところ大」とであると主張している。学生にとっては、訳をめぐる問題を議論し理解することによって、異なる言語の類似・差異に関する独特の知見を得ることができ、また、このような両言語の特徴や差異が頭の中に定着することによって、言語を単独に用いるにせよ訳すために用いるにせ

よ、その使用に自信を持ち、確実な成果を収めることができるようになる、と説いている¹。つまり、母語の理論的枠組みを使って、それを説明言語とし、他の言語構造を理解できるようになることで、言語習得が進むのである。

では、言語文化学的にはどのようなメリットがあるだろうか。言語文化学とは、「既に社会習慣として確立している言語的・文化的諸特徴を研究対象とし、両者の相関関係を科学的に記述すること」²（牧野、1996）、と定義されているが、言語構造と文化を関連付けて学ぶことで、より有機的な文化理解を可能にするのではないか。

翻訳をしていると、言語構造の違いのため翻訳が困難になったり、文化が違うため語彙自体を訳せなかったり、訳したとしても意味するところが異なってしまうたり、ただ訳しただけでは意味をなさない場合等さまざまなケースにぶつかる。そうした時に言語構造の違いと文化の違いを認識することができる。言語学者の牧野成一は、著書『日本語を翻訳すること』(2018)の中で、翻訳は日本語と英語が深層でどう異なっているか、その「認知的な視点」の違いを明らかにすると語っている。牧野は、「認知的な視点」というのは、人が外にあるものを心理的にどうとらえるかということと関わる、と論じている。翻訳者は原語の言語・文化の持つ認知上の特徴をぎりぎりまで翻訳に生かそうとするが、生かせない部分は翻訳で消えていくというのである³。そういった、「認知的な視点」の違いを認識し、翻訳で失われるものを自覚するということは異文化理解の重要な核の部分となるであろう。一方、相違点だけに限らず、「認知的な視点」の類似点も発見するだろう。言語も文化も異なるにも関わらず、「人が外にあるものを心理的にどうとらえるか」そして「どう表現するか」が類似している部分もあるのである。そういった共通点を発見することで、「認知的な視点」の共通性も学ぶことができる。

第三に、映画の翻訳は自由度が高く、訳者の個性が発揮しやすい。本や記事の翻訳においても機械的に語を置き換えることはできず、前後の文脈を含めてメッセージ全体を解釈し、それを目標言語に変えて、読みやすく理解しやすく表現する必要があるが、映画の翻訳ともなると、より一層全体の流れや登場人物の感情や性格などを踏まえながら訳さなければならず、その理解の上で、どうそれを表現するかにおいては個性が出やすく、表現の自由度も高い。そういった点で、英語学習者が映画翻訳に取り組むとき、自分の想像力や表現力を駆使する創造的作業でもあるため、学習者のモチベーションが高まることが多い。映像の助けもあるため、楽しみながら学べるメリットは大きい。

本論文では、ここに挙げた3点に関して、学生が映画で使われた口語表現のどのような部分を難しいと感じ、訳す時にどのような言語文化学的相違点や類似点を学んだか、そして自由度の高

い翻訳にどう取り組んだかを、アンケート結果も踏まえ分析し、考察していく。

2. 方法

2.1 対象者

英語の翻訳クラスを履修する関東在住の女子短大生36人を対象とした。彼女たちの英語力はTOEIC200点台から700点台までまちまちである。全員、映画を英語から日本語に翻訳することは初めてであった。

2.2 調査時期

2018年9月～11月

2.3 教材

ディズニーによる実写版 *Cinderella*

シンデレラのストーリー自体はヨーロッパ各地の伝承をもとにした童話であるが、2015年のディズニー映画実写版*Cinderella*は、フランスのシャルル・ペローによる*Cendrillon, ou la Petite Pantoufle de verre*をもとにしている。このストーリーは誰もが一度は幼いころ読んでいたようなよく知られた童話であるため、映画翻訳初心者でも取り組みやすい。特に実写版*Cinderella*は、童話のストーリーを継承しつつも、ディズニーの解釈によって現代風にアレンジされたところもあり、古典といえども学生が違和感なく翻訳に取り組めると考えた。

文化比較に関しては、映画の中では、どこの国のどこの地方の話とは限定されていないが、シャルル・ペローが民間伝承を集めて書いた童話をもとにディズニーがアメリカで制作した映画であるため、欧米文化が反映されている。

2.4 調査方法

①2015年に公開されたディズニーによる実写映画*Cinderella*の中から、以下の3つのシーンを観て、個々にスクリプト⁴の翻訳を行う。なお、字幕にするための字数制限などは、特に設けなかった。

1. エラと王子の出会いのシーン

2. フェアリーゴッドマザーが魔法をかけて、エラを宮殿に行かせるシーン

3. 宮殿でエラと王子がダンスを踊るシーン

- ②それぞれのシーンの訳を話し合い、グループで完成させ、発表し、考察をする。
- ③翻訳について難しかった点や、言語表現、文化の相違点、類似点に関してアンケートを取る。

以下は学生に実施したアンケートである。

【アンケート】

『シンデレラ』の映画の翻訳をやってみての感想を書いてください。

- I. 『シンデレラ』の訳で難しかったところはどんなところですか？ 1（少し） 2（たまに）
3（中くらい） 4（頻繁） 5（非常に頻繁）の当てはまるものに○をしてください。
- 1. 辞書を引いても単語そのものの意味が分からなかった。 1 2 3 4 5
 - 2. 連語（イディオム）の意味が分からなかった。 1 2 3 4 5
 - 3. 単語の意味は分かっても、文法がわからず、文章の意味が取れなかった。 1 2 3 4 5
 - 4. 意味も文法もわかっているが、日本語で何と訳せばよいかわからなかった。 1 2 3 4 5
 - 5. 文化的背景の違いがわからず、訳すのが難しかった。 1 2 3 4 5
- II. 『シンデレラ』を訳した中で、難しかったセンテンスやフレーズを書いてください。それについて、自分の訳と難しかった理由を書いてください。
- III. 『シンデレラ』の翻訳をする中で、日本と欧米の文化の相違点や類似点、または言語表現上の相違点や類似点を見つけられましたか？下記に具体的に書いてください。
- 1. 相違点
 - 2. 類似点
- IV. 『シンデレラ』を訳した感想を自由に書いてください。

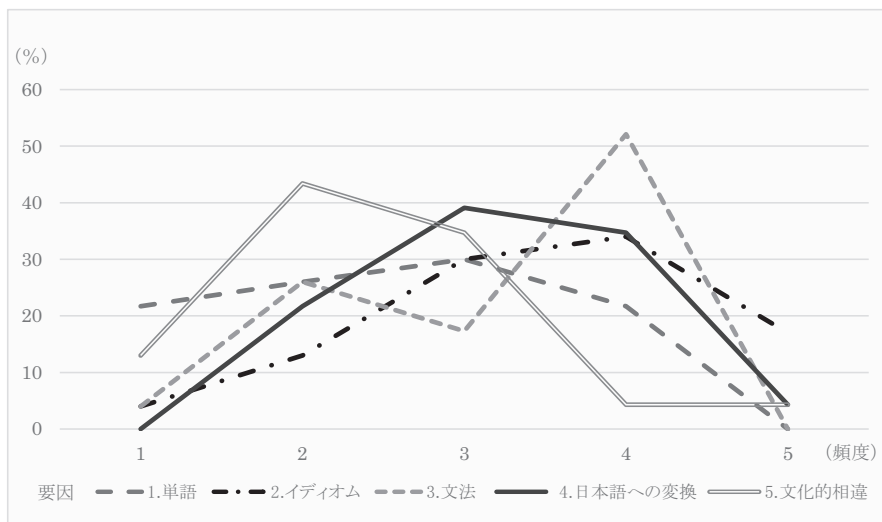
3. 結果及び考察

3.1 訳を難しくする要因とは

アンケートの結果の分析により、学生が映画の口語表現を理解し翻訳する中で、訳すのに難しさを感じた要因とは何かを明らかにしていく。また、理解や翻訳に戸惑ったとアンケートで答えているフレーズやセンテンスを示しながら、その理由を分析し、文化的相違点や共通点を考察していく。

まず、質問Iでは、1. 単語 2. イディオム 3. 文法 4. 日本語への変換 5. 文化的相違、の中でどの要因によって翻訳が難しくなる場合が多いのか、調査した。結果は、下記のグラフの通りである。

図1 アンケートI集計グラフ



グラフを見ると、イディオム、あるいは、文法がわからず、理解が難しかった頻度を、4（頻繁）としている学生が、それぞれ34%、52%と多かった。イディオムに関しては、ひとつひとつの単語の意味ばかり追ってしまって、いくつかの単語がセットで意味を成すのだということに気づかず、意味が取れなかった学生が多かった。また、イディオムの意味の調べ方が難しかったという学生もいた。文法に関しては、52%の学生が文法の理解不足によってセリフの意味がわからない場合が頻繁にあったと答えている。特にTOEICスコアが400点以下の学生は、センテンスが長くなると文構造がわからなくなり、セリフの意味が理解できなかった場合が多かったようである。

る。一方、意味も文法もわかっているが、日本語でなんと訳せばよいかわからなかったという頻度は3（中くらい）を選択した学生が多かった。意味はわかるのに適当な日本語にできないもどかしさを味わったと答えている。最後に、文化的背景の違いがわからず訳するのが難しかった頻度は2（たまにあった）を選択した学生が多かった。ひとつの単語に込められた背景が文化によって違い、その違いがわからなかったり、訳に反映できなかつたりしたと答えている学生が多い。

3. 2 訳が困難だったセリフやフレーズ

次に、アンケートⅡで、実際に学生が訳するのが難しかったと答えたセリフやフレーズをシーンごとに詳しく分析し、文化的相違点や共通点に関しても考察していく。以下、「エラと王子の出会いのシーン」、「フェアリーゴッドマザーが魔法をかけてエラを宮殿に行かせるシーン」、「宮殿で王子とダンスを踊るシーン」の3つの場面に分けて記述していく。

3. 2. 1 エラと王子の出会いのシーン

エラ (Ella) が継母のいじめに耐え切れず、家を出て泣きながら馬を飛ばして森へ駆けていき、そこで王子 (Kit) と出会うシーン。ここでは、王子は身分を隠してKitと名乗る。以下はこのシーンのスクリプトである。学生が訳すのに難儀した口語表現に下線を引いた。

Kit: Miss! Miss! Are you all right? Hold on!

Ella: I'm all right, thank you! That's fine.

Kit: Are you all right?

Ella: I'm all right, but you've nearly frightened the life out of him.

Kit: Who?

Ella: The stag. What's he ever done to you that you should chase him about?

Kit: I must confess I've never met him before. He is a friend of yours?

Ella: An acquaintance. We met just now. I looked into his eyes, and he looked into mine, and I just felt he had a great deal left to do with his life. That's all.

Kit: Miss, what do they call you?

Ella: Never mind what they call me.

Kit: You shouldn't be this deep in the forest alone.

Ella: I'm not alone. I'm with you, Mister... What do they call you?

Kit: You don't know who I am? That is... They call me Kit. Well, my father does when he's in a good mood.

Ella: And where do you live, Mr. Kit?

Kit: At the palace. My father's teaching me his trade.

Ella: You're an apprentice?

Kit: Of a sort.

Ella: That's very fine. Do they treat you well?

Kit: Better than I deserve, most likely. And you?

Ella: They treat me as well as they're able.

Kit: I'm sorry.

Ella: It's not your doing.

Kit: Nor yours either, I'll bet.

Ella: It's not so very bad. Others have it worse, I'm sure. We must simply have courage and be kind, mustn't we?

Kit: Yes. You're right. That's exactly how I feel.

Ella: Please don't let them hurt him.

Kit: But we're hunting, you see. It's what's done.

Ella: Just because it's what's done doesn't mean it's what should be done.

Kit: Right again.

Ella: Then, you'll leave him alone, won't you?

Kit: I will.

Ella: Thank you very much, Mr. Kit.

Follower: There you are, Your High...

Kit: It's Kit! Kit! Kit! I'm Kit. I'm on my way.

Follower: Well, we'd better get a move on, Mr. Kit.

Kit: As I said. On my way. I hope to see you again, Miss.

以下の表に、学生が理解や訳に戸惑った口語表現と、最終的にグループで話し合って決めた訳を記した。この表を基に、学生の学びや、文化的相違点、類似点を考察していく。

表1 学生が訳に戸惑った口語表現とその訳（エラと王子の出会いのシーン）

No.	映画の中のせりふ	英英辞典の訳	学生の訳
1	Miss !	Miss used especially by men to address a young woman when they do not know her name	・お嬢さん！ ・君！
2	frightened the life out of him	to frighten someone very much	・彼をひどく驚かせたのよ。
3	An acquaintance	not close friends with sb, but having met a few times before	・知り合いよ。 ・まあそんなところ。 ・さっき出会ったのよ。
4	I just felt he had a great deal left to do with his life.		・彼はまだまだ生きてやらなきゃいけないことがたくさんあるんだって感じたの。 ・彼はまだまだやりたいことがたくさんあるからここで死ぬわけにはいかないんだって感じたの。
5	That's all.	used to tell someone that you have told them everything you know	・そういうことよ。 ・だからよ。 ・それだけよ。
6	Miss, what do they call you?		・君の名前は？ ・お嬢さん、なんとお呼びすれば？
7	Mister…What do they call you?		・あなたのお名前は？ ・なんとお呼びすればいいですか？ ・お名前を伺っても？
8	Of a sort	used to say that something is partly true but does not describe the exact situation	・そんなようなものだよ。 ・まあね。 ・そんなところ。
9	That's very fine.		・素敵ね。 ・すごいじゃない。 ・そうなのね。
10	Do they treat you well?		・みんな親切にしてくれるの？ ・大切にされているの？
11	They treat me as well as they're able.		・彼らができる程度にはね。 ・彼らにはね。 ・まあまあよ。
12	It's not your doing.		・あなたのせいじゃないわ。
13	Nor yours either		・君のせいでもないだろう。 ・あなたのせいでもないですよ。

No.	映画の中のせりふ	英英辞典の訳	学生の訳
14	I'll bet	used to say that you are fairly sure that something is true, although you cannot prove this	・賭けてもいい。 ・きっと。 ・そう思うな。 ・絶対。
15	It's not so very bad.		・そんなにひどくもないわ。
16	Others have it worse		・もっとひどい人たちもいるわ。 ・もっと大変な人たちもいるわ。
17	It's what's done.		・そういうものなんだよ。 ・それが目的なんだよ。
18	Just because it's what's done doesn't mean it's what should be done.		・そういうものだからって、そうすべきだということではないわ。 ・そういうものだからって、そうしていいとは限らないわ。
19	Your High…		・陛下… ・陛…

まず表のNo.1のMiss!という未婚の若い女性に対する呼びかけの一語は、訳し方がグループによって、「お嬢さん」か、「君」かに分かれた。「お嬢さん」と訳したグループは、その後の訳が丁寧な口調になったが、「君」と訳したグループは、その後の訳もカジュアルな言い回しになっていった。日本語では、相手を何と呼ぶか（他称詞）は、年齢、親しさの度合い、尊敬の気持ちの度合い、相手が好きか嫌いかなどによって細かく分かれる。「お嬢さん」だと、若い女性に対して丁寧な尊重の念が加わるため、「～ですか」「～しましょうか」などの丁寧語が付きやすいが、「君」という呼び方は、「～なの」「～しようか」など、お互いの距離が近いニュアンスのカジュアルな言い回しが後にきやすくなる。Miss! という一語をどう訳すかは、ふたりの距離感を決定するうえで非常に重要になってくることがわかる。

表のNo.6、No.7、に関しては、“they”が指し示すものが漠然としている。名前を聞くときに、“What do they call you?”という言い方は、“they”に、みんな、周りの人、という意味を含めて「みんなはあなたのことを何と呼ぶの？」と聞いているわけだが、日本語に直訳すると不自然でtheyが前触れなく唐突に出てくる違和感がある。これも英語独特の言い回しで、当初学生からはtheyが誰を指すかわからない、という意見が多かった。このtheyの使い方は、No.10、No.11にもみられる。

No.11の“They treat me as well as they're able”に関しては、学生が一番理解が難しかったと挙げたセリフである。エラは継母とその娘たちにひどい扱いを受けている。しかし、badや

cruelなどと表現せず、副詞のwellを使って、“as well as they’ re able”と表現している。クラスの話し合いでは、“They treat me as well as they are able to treat me.”が省略された表現で、つまり「彼らはもともと人を親切に扱う能力がない人たちだが、その人たちにはよく扱っている」という意味で、暗に「大切には扱われていない」ということを示している、という意見が多数だった。エラの表情とこのセリフで状況を察したキットが“I’m sorry.”と応じている。

では、英語圏の人はこのセリフをどう解釈するのであろうか。English Language & Usage というサイトでは、このセリフの解釈について英語で様々な意見が書かれている。例えば、次のようなコメントがある。Kit asked if she’s being treated well but since Cinderella can’t say “No they abuse me, they’re monsters,” she simply explained that they treat her well with their fullest capacity to treat people well.⁵ 言いにくいことや言いたくないことは、ほかした言い方をしたり、皮肉を混ぜて表現し、それを聞く側は、その真意を察して答えるというやりとりは、日本でも英国圏でも共通であるといえる。

No.19 に関しては、最初、この“Your High…”が何を意味するのかわからなかった学生が多かった。これは“Your Highness”と従者が言おうとしたのを、身分を明かしたくなかった王子が、“It’s Kit! Kit! Kit!”と遮るシーンである。“Highness”は、「高位であること」を意味し、王子の名前を直接呼ぶことを避け、敬称で呼ぶ習慣が現れている。この習慣は日本でも同様である。例えば、日本では、天皇陛下のことを、お名前前で呼ぶことはせず、「天皇陛下」「陛下」といった呼び方をする。「陛下」の「陛」は宮殿の階段のことで、階下にいる近臣を通じて奏上する意から、「陛下」と呼ぶ。同じように皇族に対しては、「宮殿、殿堂の下」を意味する「殿下」を用いる。このように尊敬の対象である天皇、皇后、皇族などに直接呼びかけることを忌むことで敬意を表すのである。こういった習慣は、英語圏でも日本でも共通の文化的側面であることがわかる。

映画 *Cinderella* では、王子は父親が機嫌のいいときは、自分をKitと呼ぶと語っているが、Kitは、Christopherの愛称でもあり、子猫、子ぎつねの意味もある。父親が愛情をこめて、この両方の意味のあるKitという呼び方で息子と呼ぶという親子のほほえましい関係がここに見えてくる。そして、王子をKitと呼べるのは、王である父親と、彼が王子であることを知らないエラだけ、というところが、この物語の重要な鍵となっていくのである。

3. 2. 2 フェアリーゴッドマザーが魔法をかけてエラを宮殿に行かせるシーン

妖精のゴッドマザーが現れて、魔法をかけるシーンは、特に訳しにくいユーモアや呪文、単語が多い。以下はこのシーンのスクリプトである。学生が訳すのに難儀した口語表現や単語に下線を引いた。

Ella: Who are you?

Fairy godmother: Who am I? I should think you'd have worked that one out. I'm your hairy dogfather. I mean, fairy godmother!

Ella: You can't be.

Fairy godmother: Why not?

Ella: They don't exist. They're just made up for children.

Fairy godmother: Didn't your own mother believe in them? Don't say no, because I heard her.

Ella: You heard her?

Fairy godmother: Fiddle-faddle, fiddle-faddle. Right! First things first. Let me slip into something more comfortable. That's better. Now, where was I?

Ella: How did you...

Fairy godmother: Yes, Let's see. What we need is something that sort of says, "coach."

Ella: That trough?

Fairy godmother: Doesn't really say "coach." No, no, I'm liking fruit and veg. Do you grow watermelons?

Ella: No.

Fairy godmother: Cantaloupe?

Ella: I don't even know what that is.

Fairy godmother: Artichoke? Kumquat? Beef tomato?

Ella: We do have pumpkins.

Fairy godmother: Pumpkins? This will be a first for me. Always interesting. I don't usually work with squashes. Too mushy.

以下の表に、学生が訳しにくかったとアンケートで回答したセリフや単語と、各グループが話し合って決めた訳を記した。

表2 学生が訳に戸惑った口語表現とその訳（フェアリーゴッドマザーが魔法をかけるシーン）

No.	映画の中のセリフ	英英辞典の訳	学生の訳
1	I am your hairy dogfather. I mean, fairy godmother.		・私はフェアリーゴッドマザーよ ・私はヘアリーゴッドファザー、 じゃなくてフェアリーゴッドマ ザーよ ・私はあなたの後見人の妖精よ
2	Fiddle-faddle, fiddle-faddle		・フィデルファデルフィデルファ デル ・ちちんぷいぷい
3	Cantaloupe	A type of melon with a hard green skin and sweet orange flesh	・メロン
4	Artichoke	A type of round green vegetable, which has buds with leaves that you eat, which are like the petals of a flower	・アーティチョーク ・チョウセンアザミ
5	Beef tomato	A very large fleshy variety of tomato	・トマト ・大きなトマト
6	mushy	soft, wet, unpleasant	・ぐじゃぐじゃに柔らかい ・果肉がどろどろして柔らかい

まず、多くの学生がどう訳していいかわからなかったと挙げていたのは、フェアリーゴッドマザーが自己紹介した時に、“I am your hairy dogfather. I mean, fairy godmother”と言ったセリフである。これは、fairy godmotherをもじってhairy dogfatherと言い換えて笑いを誘うシーンである。英語だと、fairyとhairyが韻を踏み、かつgodmotherとdogfatherは、godの文字の並びを言い換えてdogとし、motherとfatherを入れ替えて、dogfatherという単語を作っているの、言葉遊びのユーモアとして成立するが、そのまま日本語に訳して、「毛の多い犬のお父さんではなくって、つまり、妖精の後見人なのよ。」と訳しても、何のことかわからなくなる。このセリフは訳すと意味が失われるだけに、訳者の力量が問われるところでもあり、かつ翻訳の自由度の高いところでもある。学生たちは、「私はフェアリーゴッドマザーよ。」とユーモアの部分を省いて訳したグループもあれば、「私はヘアリーゴッドファザー、じゃなくてフェアリーゴッドマザーよ。」と英語の発音のまま訳に入れたグループもあった。

フェアリーゴッドマザーのセリフに、“Fiddle-faddle, fiddle-faddle”というセリフがある。これも訳し方がわからなかったという学生が多かったセリフである。fiddle とはバイオリンの一種、そしてfaddleは「ぶらぶら過ごす、ふざける、くだらないこと」等の意味がある。この語

呂が似ているふたつの単語を組み合わせて、nonsenseの意味で、感嘆詞として、あるいは間投詞として使われる場合が多い。これも、呪文のように「フィデルファデルフィデルファデル」と訳したグループもあれば、「ちちんぷいぷい」と訳したグループもあった。

そして、このシーンには、フェアリーゴッドマザーが馬車に変える野菜や果物を探すために、いくつか名前を挙げるシーンがある。“Cantaloupe ? Artichoke ? Kumquat ? Beef tomato ?”と野菜や果物の名前を羅列するのだが、どれも日本人にはなじみが薄いため、辞書を引いてもよくわからなかったという学生が多かった。Cantaloupeはウリ科のマスクメロンの一種で果肉はオレンジ色、果皮はごつごつしていて、日本で売られているメロンとは見かけが違う。Artichokeはチョウセンアザミだが、一般的に日本で売っているのを見ることは非常にまれである。Kumquatはキンカン、Beef tomatoは非常に大きなトマトの種類で、なかなか日本ではお目にかからない。このままでは訳にならないため、「メロンは？アーティチョークは？キンカンは？トマトは？」と、日本にある同じ種類の野菜や果物の名前に変えていたグループが多かった。

どの野菜や果物も庭になかったエラが「pumpkinsならばある」と言うのだが、フェアリーゴッドマザーは、“too mushy”だと言って難色を示す。日本人には、カボチャがぐじゃぐじゃに柔らかい、という感覚がないが、アメリカでpumpkinといえは、大きなオレンジ色で、Halloweenに中をくりぬいてJack-o'-lanternに使うようなパンプキンのことなので、中には種や綿が入っていて、中に手を入れて種を取り出そうとするとぐちゃぐちゃぬるぬるしている。一方フランスには様々な種類のカボチャがあるが、その中でもCitrouilleという種類のカボチャはアメリカでハロウィンに使われるものとよく似ている。つまり日本人が想像するpumpkinと欧米の人が指すpumpkinが違うので、ここもなかなか訳しにくいところである。

このpumpkinのように、欧米と日本では、訳したとしても、違う想像を喚起させるものはよくある。例えば、「彼は手土産にメロンを持ってきた」という文章を日本人が読んだ場合、箱入りの高級メロンを思い浮かべる人もいれば、ジューシーで柔らかな薄緑色の果肉の色を思い出す人もいるかもしれない。メロンは値段の高い果物なので、彼が訪問先に気を遣っている、あるいは訪問先の人を大切に思っている心情が伝わってくる。しかし、同じ文章を欧米の人が読むとすると、「メロン」は、スーパーで山積みになって、ひとつ1ドルや2ドルあるいは1ユーロや2ユーロで売られているような果物で、形も日本のメロンのように美しく整ってはいないし、果肉も日本のメロンより硬い場合が多いので、日本人が想像するような高級感を思い浮かべることはない。このように同じ「メロン」という単語に対して抱くイメージが異なるために、伝えたかつ

た心情が伝わらない。つまり、翻訳によって失われるもの (Lost in translation) があるのである。映画の場合は、映像がそれを補い伝える役目も担う。

3. 2. 3 宮殿でエラと王子がダンスを踊るシーン

以下は、フェアリーゴッドマザーに魔法をかけてもらったエラが、カボチャの馬車で王宮へと向かい、舞踏会で王子とダンスを踊るシーンである。王宮に到着すると、従僕に変えられたトカゲが馬車の扉を開けてエラを送り出し、エラは舞踏会に行く。そこでエラは再びキットと出会い、ダンスを踊る。キットは王子であったことを知るのである。

Lizard: Miss Ella.

Ella: Thank you. I'm frightened, Mr. Lizard. I'm only a girl, not a princess.

Lizard: And I'm only a lizard, not a footman. Enjoy it while it lasts.

Announce: Your Majesty, Your Royal Highness, My Lords, ladies and gentlemen, distinguished visitors and people of our land, the prince shall now choose his partner for the first dance. Let our ball commence!

Kit: Excuse me.

King: A thousand apologies, Your Royal Highness. I don't know what happened.

Ella: Mr. Kit.

Kit: It's you, isn't it?

Ella: Just so.

Kit: Your Highness... If I may, that is, it would give me the greatest pleasure, if you would do me the honor of letting me lead you through this... the first...

Ella: Dance?

Kit: Yes, dance. That's it.

Ella: They're all looking at you.

Kit: Believe me, they're all looking at you.

以下がこのシーンで学生が訳に戸惑ったと挙げたセリフや単語である。

表3 学生が訳に戸惑った口語表現とその訳（宮殿でエラと王子がダンスを踊るシーン）

No.	映画の中のせりふ	英英辞典の訳	学生の訳
1	footman	a man employed as a servant in a large establishment as a palace to run errands and do chores	・従僕 ・従者 ・召使い ・フットマン
2	Your Majesty	used when talking to or about a king or queen	・陛下
3	Your Royal Highness	used to speak to or about a royal person such as prince or princess	・殿下 ・姫君
4	My Lords	a man who has a rank in the aristocracy	・閣下
5	ladies and gentleman		・紳士淑女の皆さん
6	distinguished visitors		・来賓の皆さま ・名高い方々
7	people of our land		・国民の皆さん
8	Just so	used to say yes or agree with someone	・そうです ・その通りです ・私です
9	If I may, that is, it would give me the greatest pleasure, if you would do me the honor of letting me lead you through this …the first…		・もし私にあなたをリードさせていただける光栄を与えて下さったら、それは大変な喜びなのですが。つまり…… ・もしあなたのリード役を仰せつかることができましたら、それは私にとっての大きな喜びなのですが、その、つまり……
10	That's it.		・そう、それ！ ・それが言いたかったんだ ・その通り

このシーンでも、Your Majesty, Your Royal Highness, My Lordsといった、高い位の人への呼びかけの言葉が使われている。Majestyは本来、威厳とか尊厳の意味だが、国王や女王に呼びかける際に最高度の敬意を表すため用いられる。Lordは君主や領主の意味だが、これもMy Lordで、「わが君」「閣下」などの訳があてられる。こうした地位の高い人を敬称で呼ぶ言い方は文化の共通性のひとつの例である。

一方、トカゲが魔法で変えられたfootmanという単語は、日本人にはなじみが薄い。馬車やド

ア、食卓に侍る制服を着た召使、従僕のことだが、男性の召使は女性の召使よりコストが高く、footmanは必要不可欠なものではなかったため、footmanを持つことは贅沢で、ステータスシンボルでもあったという。「使う」よりは人に「見せる」対象であったため、外見がいい者が選ばれることが多く、ひざ丈の半ズボンにストッキングという衣装を身に着けていた。そうした背景を知ると、トカゲが身に着けている衣装も納得がいくし、footman付きの馬車で王宮に行くということは、エラがそれなりのステータスのある婦人として見られることもわかる。しかし、訳す時は、そういった説明を加えることができないため、訳を迷った末、「従者」かあるいは「召使い」と訳したグループが多かった。単語の訳では、文化的背景がよく伝わらず、ここでもLost in translationが起きてくることとなる。

王子がエラにfirst danceを申し込むシーンでは、王子のセリフは以下のように非常に長い。

“Your Highness... If I may, that is, it would give me the greatest pleasure, if you would do me the honor of letting me lead you through this... the first..” 王子は失礼にならないよう、最大級の尊敬を込めた言い方でエラをダンスに誘っている。カジュアルな言い方をする場合は、言い回しは簡潔で短いが、フォーマルになればなるほど、言い回しが長くなっていくのである。それは日本語でも同じ現象が起きる。カジュアルな状況の場合や、親しい間柄どうしの会話の場合は、直接的に簡潔に言いたいことを伝えるが、フォーマルな状況であったり、相手の地位が高い場合は、尊敬語や謙譲語を使ってより長い言い回しで表現する。そういった習慣は英語でも日本語でも同じであることがわかる。

このセリフの訳に関しては、各グループが大変苦労し、クラスの65%の学生が一番難しかった訳だったと答えていた。このセリフを訳してみたの感想としては、「まわりくどい言い方をしすぎていて、推量を表す助動詞が多く、非常に訳しづらかった」「王子が緊張していて、なかなかダンスと言い出せない雰囲気を出したかったが、自分の訳はそれが表現できなかった」「英語のままならよくわかるのに、それをうまく表す日本語の言い回しがわからなかった」などのコメントが多かった。

この後、the first…と言いよどむ王子に、エラは“Dance?”と聞く。そして王子が、それが言いたかった、とばかりに満面の笑顔で、“Yes, dance. That’s it.”と答えるのだが、ここで今までの緊張が解けて、森ですでに会ってお互い惹かれあっているふたりの親しさが言葉のカジュアルさと短さに現れ、フォーマルな物言いと取って変わられるのである。

3.3 文化や言語表現上の相違点と類似点の認識

欧米と日本の文化や英語と日本語の言語表現上の相違点と類似点に関して、各シーンごとの考察にも記したが、学生がアンケートⅢで挙げた項目を整理してみたい。

まず、言語表現上の相違点としては、以下のような3つの項目が挙げられた。①英語の人称代名詞は、日本語より種類が少ない。そのため、日本語に訳す時はいくつもの選択肢を考え、微妙なニュアンスの違いを考えながら言葉を選ばなければならない。②英語には必ずと言っていいほどセンテンスに主語があるが、日本語は主語を入れずともセンテンスが成立する。そのため、あえて主語を訳さない方が自然な訳になることもある。③英語は名詞に冠詞を付けるが、日本語には冠詞がない。英語では、冠詞自体に数や特定、不特定などの様々な情報が含まれているが、日本語に訳す時はその情報が失われがちになる。

一方、文化背景の相違点としては下記のような項目が挙げられた。④欧米と日本では、単語やフレーズの背景にある共通概念が違う場合が多いため、単語の背景にある意味が伝わらない場合がある。例えば、first danceは、舞踏会のオープニングで一番地位の高い人が主賓と踊るダンスなので、王子がエラとfirst danceを踊るということは、彼女を一番大切なゲストだと周りに示していることになる。しかしそういった文化背景がない日本で、「最初のダンス」と訳しても、背景に示されている意味は伝わらない。footmanを「従者」と訳しても、背景が伝わらないのと同じである。⑤欧米のpumpkinは、日本の「かぼちゃ」とは色も大きさも違うように、同じ単語でも、ところ変われば品替わるものがあり、イメージするものが変わってくる場合がある。⑥野菜の種類が欧米と日本では違うため、単語を直訳しても伝わらないものがある。以上の項目が相違点として挙げられた。このような相違点に関しては、言語表現上であれ、文化的背景の違いであれ、翻訳の時にそのニュアンスを十分伝えきれずに失われてしまうLost in translationが起きる。それとは逆に、人称代名詞などは、日本語の方がより豊富な選択肢を持っているがゆえに、英語の人称代名詞を訳す時は場面を総合的に判断して訳語を選ぶ必要性が生じてくる。

次に、類似点としては、以下のような項目が挙げられた。①地位の高い人を呼ぶときは、名前ではなく敬称で呼ぶ。②丁寧にフォーマルに表現するときは、センテンスが長くなる。逆に親しい間柄ではセンテンスが短いカジュアルな言い方が好まれる。③言いにくいこと、言いたくないことはストレートに表現せず、婉曲に暗示のような言い方をする。

このような類似点には、文化や言語が違って、人間が同じような価値観や似たような社会通念をもっていることが伺える。こうした発見は、異文化理解の上でも重要な鍵となる。

3.4 学生の感想

アンケートⅣでは、翻訳を体験した感想を聞いた。まず、英語を話す速度の速さに驚いた、という感想が多かった。自然なネイティブの会話はテンポが速く、聞き取りが難しく、かつ英語字幕を読むのも追いつかなかった、という学生が多かったが、「単語やイディオムを調べて翻訳した後で映画をもう一度見ると、理解度が格段に違って面白かった」というコメントもあった。

イディオムに関しては、「口語表現にはイディオムが使われることが多い」と感じた学生や、「イディオムがうまく訳せず悩んだ」という学生がいた。また、長いセリフになると、「文法がわからず、意味が理解できなかった」という学生もいて、基礎的な英語力の不足を痛感した学生も多かった。

文化的相違点共通点に関しては、「日本語の尊敬語に値するような丁寧な表現があることを知って文化の共通点を見つけられてうれしかった。」といった感想や「単語やセリフから文化的背景の違いを学べたのは楽しかったが、それを訳に反映できずもどかしかった」といったコメントもあった。

翻訳の自由度に関しては、「グループによって訳し方が違い、それによってそのシーンの雰囲気が変わるのが面白いと思った。」という感想や「意識も含め自由に訳せることは非常に楽しかった。」という感想が寄せられた。学生たちが訳した3つのシーンをプロの訳者はどう訳しているか日本語字幕で確認した時は、プロの訳は短く簡潔で、それでも流れを汲み意味が通るように訳しているのも、その技術に驚嘆したという感想とともに、直訳でなく意識が多くて、実はセリフがその通りには訳されていない部分が意外に多い、という気づきもあった。

総じて学生のモチベーションが高く、アンケートを取った時も、学んだことが記憶に定着している率が高いと感じた。これは、視覚と聴覚からも情報を得て総合的に学んでいる結果であると思われる。

4. おわりに

映画 *Cinderella* を翻訳することで、学生は英語教材として制作されたものではなく、一般人向けのエンターテインメントとして制作された生の英語に触れることにより、より多くのイディオムや口語表現を学び、またネイティブの話すナチュラルなスピードも意識することができた。加工された英語教材から抜け出して、authenticityを求め、映画を素材として使うことは英語学習に

非常に有効だと思われる。また、映画を翻訳することにより、英語と日本語の言語構造の違いや文化の相違点、類似点も映像とともに学ぶことができた。この知見は今後英語を学んでいく上でプラスに作用すると思われる。それに加え、映画翻訳の自由度の高さは、学生の翻訳へのモチベーションを高めた。複数のグループの翻訳の発表を比較することにより、訳の違いが醸し出す雰囲気の違いや解釈の違いを実感し、翻訳の持つ創造性を魅力と感じた学生が多かった。今回は、映画翻訳が初めての学生ばかりだったので、翻訳の字数は意識せず、内容が伝わるようにわかりやすく訳すことに主眼を置いたが、映画翻訳を字幕に使う場合は、一度に読める字数が限られるため、よりコンパクトに訳す技術が求められる。今後はいかに端的にわかりやすく訳すか、その技術についても学んでいく必要がある。

注

1. ガイ・クック著、斎藤兆史・北和丈訳『英語教育と「訳」の効用』（株式会社研究社、2012） p.87.
2. 牧野成一『ウチとソトの言語文化学—文法を文化で切る—』（株式会社アルク、1996）p.7.
3. 牧野成一『日本語を翻訳するという事』（中公新書、2018）p.5.
4. https://www.springfieldspringfield.co.uk/movie_script.php?movie=cinderella-2015(2018.12.12)
5. <https://english.stackexchange.com/questions/263254/what-does-it-mean-when-cinderella-said-they-treat-me-as-well-as-theyre-able>(2018.12.12)

参考文献

Yvonne S.Freeman, David E. Freeman, ESL/EFL Teaching(Heinemann) 1998

佐藤紘彰『訳せないもの』（サイマル出版会、1996）

北村利治、杉山泰、リチャード・ボナン、西村友美『初めて学ぶ翻訳と通訳』（株式会社松伯社、1998）

実川元子『翻訳というおしごと』（株式会社アルク、2016）

越前敏弥『翻訳百景』（角川書店、2016）

鈴木孝夫『ことばと文化』（岩波新書、1973）

鳥飼玖美子『よくわかる翻訳通訳学』（ミネルヴァ書房、2013）